全電源喪失の記憶

証言　福島第1原発

7

人の気配なくぼう然

■第2章「1号機爆発」

原発向かった陸自隊員

3月12日朝、陸上自衛隊第6特科連隊(郡山市)の佐藤勇一陸士長(22)は福島第1原発を目指し、隊の消防車のハンドルを握っていた。車は佐藤が生まれた大熊町に入っていた。あと数キロで原発だ。

だが見慣れた光景は一変していた。住宅の塀は崩れ、道路は隆起している。

人の気配がない―。

路上に自転車が倒れていた。町に住む母親や友人たちの顔が思い浮かんだ。「事故から丸1日もたってないのに、ゴーストタウンのようでした。みんな急いで逃げたんだ、と思いました」

東京電力福島第1原発事故で、避難する車で渋滞する国道＝2011年3月12日、浪江町

郡山駐屯地の消防班に出動命令が下ったのは11日夕だった。駐屯地の主力部隊は東日本大震災の災害派遣命令を受けて宮城県東松島市に向かう準備に追われていた。消防班には「東京電力が消防車を集めている」と別命が下ったのだ。

何が起きているのかは知らされず、消防班員たちは「火災に備えた現場待機か」と考えたが、幼いころから「原発は安全」と教えられてきた佐藤は「自衛隊に要請が来るのはただごとじゃない」と感じていた。

11日午後11時に駐屯地を出発する直前、母親に電話がつながった。「かあちゃん、俺、原発に行くことになったから」と告げると、ハッと驚いた様子が伝わってきた。実家は原発のすぐ近くだ。何か言いたげな母親に「とにかく逃げて」と、電話を切った。

佐藤ら5人が乗った消防車が先頭を走り、予備の消火ホースや空気ボンベ、化学防護服を積んだトラックが続いた。福島駐屯地で合流した消防車を加えた車列が原発正面ゲートに到着したのは12日午前7時ごろだった。

「あっ、勇一君！」

ゲートにいた東電の男性社員が話し掛けてきた。青い作業服姿で顔の半分をマスクで覆っていたが、よく見ると地元の知り合いだった。

「どうも、来ました」

佐藤はそう返した。でもなぜマスクをしているのだろう―。自分たちは全員、迷彩服にヘルメットだけの装備で来ていた。

佐藤たちは知らなかったが、1号機の炉心溶融が進み、敷地内の放射線量が上昇していた。

車列はゲート付近で待機させられた。理由の説明はなかった。すると見覚えのあるヘリコプターが降下してきた。陸自の要人輸送ヘリ「スーパーピューマ」だ。

「何で来ているんだ」。隊員たちから声が上がった。ヘリは約1時間後、原発から飛び立っていった。機中には首相の菅直人がいたが、佐藤たちは知るよしもない。

免震重要棟に入ったのは12日午前8時半ごろだ。「原子炉冷却のため消防車で水を送ってください」。ここで初めて東電から自分たちの任務を聞かされた。

(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信　篠原雄也)